

源道濟試考

源道濟は、中古三十六歌仙の一人でありながら『日本文学史・中古』（久松潜一編）では、「道濟についても『勅撰集歌人伝の研究』杉崎重遠著（昭和19・3）以降新しい研究はみられない」と言われた如く、省りみられることの少ない歌人であった。杉崎氏の綿密な経歴、人物考証に多大の恩恵を感じつゝ、もう一度、私なりに試みた論がこれである。結果的には結論が同じで重複する箇所も多いと思われるが、努めて、他の資料をもさがしたつもりである。

一

道濟のよみ方として、み・ち・なり、み・ち・ず・みの二通りがある。み・ち・ず・みは、後十五番歌合の群書類従本にある振仮名で、内閣文庫a・b本、桂宮本aでは振仮名なし、内閣文庫c、宮内庁b本では、み・ち・なりである（歌合大成三による）。よみ方に関連し、他の歌人と交友ぶりをもながめてみよう。み・ち・なりは他に、赤染衛門集、和泉式部集、能因法師集等に次のようにみえる。

（ちくぜんのさきのかみみちたゞ―桂宮本―）

ちくぜんのかみみちなり国にてなくなりぬときゝてまかり申しにきたりしが思ひ出でられて

帰るべきほどをたのめし別れこそ今は限りの旅にはありけれ（群

五 島 和 代

書類従本赤染衛門集）

はるつかた人のきたりければ花もみな散にければみちなりな
どにや

徒に帰らむ事を思ふかな花の折こそつくべかりけれ
返しをとこ

散にけむ花をば今は如何せむみて過しけむ人に問ばや（統国歌大
観、和泉式部集）

故筑前守のこのみちなり（親範歎）の朝臣のきて歌よみ物語
なとするにあはれなれば

君みればあさくらやまにかくれにし人にわれこそあふこゝちすれ
（桂宮本能因法師集）

道濟は、中古歌仙三十六人伝によれば、長和四年（一〇一五）二月十四日に筑前の守になっており、寛仁三年（一〇一九）卒であるから、任国で死亡することもありうるわけで、能因集には「道濟朝臣筑前にてうせにけりとときゝて」という詞書で能因の哀傷歌がみえる。桂宮本赤染衛門集にみえる、ちくぜんの前のかみみちたゞについて未詳である。

和泉式部集にみえる、み・ち・なりなどにや、は、後人の付記かとも思われるが、男の返歌は源道濟集に類歌として次のように見える。

或所に落花を思ふといふころよみしに

散りにける花の心をしらぬかな見てすぐしけむ人にとはばや

少し言葉が異なるのであるいは別の歌であるかもしれない。たゞ和泉式部集には、源道済との歌の贈答が他にも見えている。

源道済雲林院の花見にまかりて待けるにそのさくらを折て

またみせむ人しなればさくら花今一えだを折らずなりぬる（この歌は道済集に「雲林院の桜を一枝あ「る」かりつかはすとて」の詞書で見える。）

次に能因集の場合であるが、他にも

秋、つづくにくたりて道済朝臣のもとにくたらんなどもいひしものをなと思てかういひやる

夏草のかりそめにとてこしかともなにはの浦に秋そくれぬる

白河殿に道済朝臣とふたりゆきてふりうおかしきさまよまむといひて

としふれはまつおひにけりはるたちてねのひしつへきねやのうへ哉

等々、能因と道済との交際を伝えている。能因集の故筑前守は道済と思われるが、そのこのみちなりの朝臣とは不可解である。親範歟という注がある由縁である。親範は、尊卑分脈では道済の孫であるが、勅物に「或道済子」とある。おそらく能因集の詞書には、混乱があるのではなからうか。

源道済と同時代に源道成がいる。道成は御堂関白記によれば、若狭守、信濃守とあり、尊卑分脈、勅撰作者部類、二十一代集才子伝に

は、備後守、因幡守、備前守とはあるが、筑前守という事実はない。

道済、道成は二、三の点で混同されてきた。例えば、尊経閣文庫本道済集・伝藤原忠家筆道済集は実は、道成集である（私家集伝本書目による）。また阿部秋生氏も言われているごとく（和歌文学大辞典）、御堂関白記の寛弘元年（一〇〇四）正月五日の次の記事

：叙位議申時初如常 被申内府云 為式部丞頼明 道成等付故重文宅倉代封開者

の道成は道済の誤りとする事ができるかもしれない。道済は長保五年（一〇〇三）正月卅日に式部少丞になっているが道成は、右馬権頭、右衛門佐、春宮少進であり、式部丞とは見えない。道済が道成と混同されたということは、道済が道成、即、みちなりと読まれた事実を伝えていないかと思われる。

以上のことにより、一応、道済はみちなりと呼ぶべきではなからうか。又、道済とは、則天武后時代の政治家であり大文豪であり三度左右丞相に登り三度中書令となり、比すべき者なき程の栄達を極めた張説の字、道済によるのではなからうか。当時こういうことはしばしば見られたようである。例えば大江匡衡の匡衡とは、漢代のよく学を修めた学者の名であり、一条摂政伊尹の伊尹も殷の湯王の時の宰相の名であり、定子中宮の兄、伊周も、伊尹と周の武王成王の相周という二人の並び称される良相の名によると思われる。

二

杉崎氏に詳細な経歴の御調査があるが、ここでは以下の論で必要なことだけを述べることにする。

道済は尊卑分脈によれば光孝源氏で、歌人源信明の孫（信明の父

万国（中古歌仙三十六人では有国）は、
（は伊豆守）である。

「道済以言弟子也」とある。）を経て宮内少丞、藏人、式部少丞、式部大丞、寛弘三年（一〇〇六）従五位下下総権守、五年のブランクをへて、長和四年（一〇一五）二月一四日筑前守、大宰少弐となり、三月廿一日には、比叡三塔の一つ、師輔が建立した藤氏寺の楞嚴院（大鏡・江談抄による）修理の功により従五位上に叙せられる。寛仁二年（一〇一八）七月十一日には、道長の土御門殿造宮の賞により正五位下となっている。杉崎氏は、長和四年（一〇一五）十一月十七日の内裏新造による造宮賞としてあるが、年代が少し離れすぎる。御堂関白記の寛仁二年七月十一日には「被行造宮賞、以齊敍四位、土御門造作預功也」とあり七月十一日の造宮賞とは土御門造作功と見なすべきではないか。この時の事情は小右記に詳しく、「土御門殿寢殿以一間始自南庇至北庇之間也簀子高欄相加配諸受領不論新旧撰勘事者令整（營か）……未聞之事也、造作過差万倍往跡……連日京中人到彼第見風流」（寛仁二年六月二十日）とあり、新旧の勘事を蒙った受領に申しつけていることから、道長との間に何か咤りを受けたことが、これ以前にあったのであろうか。とにかく土御門殿造宮のことは、実資から「未聞之事也……当時大閤徳如帝王」と批難されている。又この時の伊与守源頼光のめざましいばかりの道長への忠義ぶりは、榮華物語あさみどりにもくわしい。その後、朝野群載に刀尹入冠にあたっての太宰府解文があり、それに道済の署名があることから、寛仁三年四月二七日までは生存かと思われるが、寛仁三年に任国でなくなったこと前述の如くである。

勅撰集に61首入集し（このうち8首は家集に見えない）、赤染衛門、能因法師、和泉式部等とも歌をやりとりした。古来風体抄によれば、ほぼ同時代の長能、道信、実方らと並ぶ「世のうたよみ」であり、歌学書『道済十体』の作者としても知られる。また、拾遺集は長能と道済とで撰んだとの伝えもある（和歌色葉集等）。

また、文章生出身であることから、漢詩文も残っている。本朝文粹に和歌序1、本朝麗藻に詩序1と詩14（うち重出1）、類聚句題抄に詩句18、新撰朗詠集に2、和漢兼作集に2、扶桑古文集に序1があり、続本朝往生伝に一条天皇の時の文士として、匡衡、以言、齊名、為時等と並んで「皆是天下之一物也」と、名前があげられ、袋草紙には「為時ハ当初道済ニ詩ヲ乞請而 後年ニハ為時道済一雙之文士ニ被番云々」といわれている。（江談抄では、「道済者以言弟子也昔請詩於以言於稱人稱之曰後風情日進時人以爲一双云々」となっているが……）和漢兼作である。

三

「日本文学史・中古」では、道済集に關し、「部立は立てないが四季、恋、雜の順にほぼ歌が排列されている」と言われているが、群書類従本によれば次のようである。（番号は群書類従本の歌順）

1 藏人に中納言の君の御もとにて歌合に春まつころ、

「平安朝歌合大成三」は、「長保三年」中納言「隆家」歌合とする。歌合資料にはこの歌合はなく、道済集から抜き出したもので、藏人にを、藏人である時にの意にとり、道済が藏人に補せられた長保三年のものであろうと推定し、そのころ中納言の君と呼ぶべき人

は隆家をおいて他にないと言われている。長保三年の中納言は、藤実資（8月25日に権大納言）・平惟仲・藤時光・藤公任（任8月25日）以上公卿補任一であり、隆家と推定された理由がわからない。長保三年（一〇〇一）の中納言の君なら、実資か公任ではなからうか。杉崎氏は公任かと推定されているが。又、中納言の君の御もにて歌合に春まつころの歌を、蔵人に預けたとはとれないだろうか。いずれにしても推定である。

4 参河入道の参河なりしほど女のなくなりけるに京にのぼりてしうとめのもとにありてまたくだるにあはれなるうたよみかはしたりけるをかきおいたりし草子をみて

参河入道とは杉崎氏御指摘の如く、前参河守大江定基、法名寂照であると思われ、播磨鑑、今昔物語に参河入道寂照とある。続本朝往生伝、今昔物語卷十九の四八話等によると、参河守時代に本妻をさしおいて愛妻（源平盛衰記によれば赤坂の遊君力寿）が病死したことから、道心を起して出家し、さらには入宋（一〇〇二）している。出家は百鍊抄によれば永延二年（九八八）四月廿六日（杉崎氏は永延元年説）、尊卑分脈によれば寛和二年（九八六）六月である。いずれとも決しがたいが、4の歌は詞書から、定基出家後そう時間がたつてない時の歌と思われる。

5 元輔が集かりてかきつけし

玉章に心のうちは知りにしを身はいづかたのけぶりなるらむ

いうまでもなく元輔死（永祚二年六月、九九〇）以後のものである。4、5と家集についての歌である。8、11、15、17、19は、あひかたらふ人（同一人物かどうかはわからない）との贈答12、4

18、は月、花、菊の歌（12歌欠）、13は述懐。

20 絵に山里に花をしみがほなる所に

これは、後拾遺集135（国家大観番号）に

屏風の絵にさくらの花のちるをしみがほなる所をよみ待ける

とあり、詞書からみて20、39は屏風歌と思われる。30、31、38は、故里に関する歌、32、33、34、35、36、41、42は花、紅葉、郭公、卯花、桜の歌。34、43、45、46、47は親、また、たらちねの服の時歌。39は父方国が能登守となった時の歌であるが、杉崎氏御指摘の「長徳二年大問書」に「能登守源朝臣方国」とあり「権記」長徳四年三月二一日の条に「亦能登守有闕早可任其替会用」とある所をみれば、方国は長徳二年に能登守となり、長徳四年（九九八）三月頃にはすでに没していたことが推量されるのである。

48 左大臣殿の秋花御覽せし御供にて、

彼が始めて官位についた長徳四年（九九八）以後のものなら、左大臣とは道長であろう。

49 ある人のもとから実方君の集をおこせたりけるにかへすとてなきよにはかたみなりける玉章を昔はさしも思はさりけむ

から、藤原実方没（長徳四年十二月、九九八）後の歌である。

50、54は、しりたる人、あひしりたる人への歌。

55 源中将家さくらいとおもしろく咲きたりしを見てめのとのも

とへやりし

長徳四年（九九八）の宮内少丞の時なら、源中将は源頼定（小右記・公卿補任）又は、杉崎氏が挙げられた源宣方であろうか。但し、

長徳四年八月十三日には宣方は没している。頼定は公卿補任に長徳四年十月二日中将とあり、寛弘五年正月七日に中将弟で正四下(公卿補任寛弘六年の条)となっているので、寛弘四年(一〇〇七)までは、源中将と呼ばれうる。

56 春ごろの中よりのぼるとて

あ。中が、都ではないことはもち論であるが、具体的にどこから来たのか不明である。57、59、60、61は、春、郭公、月みる男女の歌。

62 宰相中将殿にて春におくれたる事昨日といふことを、

宮内少丞のころなら藤原斉信(長保三年、一〇〇一年まで宰相中将と呼ばれうる)、藏人のころのものなら源俊賢(長保三年、一〇〇一から寛弘元年まで、このとき道济式部大丞)、寛弘二年以後なら源経房があげられる。杉崎氏は斉信かとされたが、斉信か俊賢かのいずれかであろう。

66 殿上人あまた大井にまかりて秋の心よみしに

67 藏人になりて待しに秋南殿にて……

68 69 おなじころほひうへにて月をみて

以上は、長保三年(一〇〇一)正月卅日藏人となってからの歌であろう。

71 たび人山ざとをみる

これは、後拾遺集 125 に

東三条院御屏風に旅人山の桜を見る所をよめる

とあり、

80 雪ふる家

も新続古今集に

東三条院の四十の賀の屏風に人の家に雪降りたる所

とあり、詞書からみて70、80は、同一の屏風歌と思われる。東三条院とは、円融院后、兼家女詮子で一条天皇の母であり、日本紀略長保三年十月九日の条に「於上東門第、有東三条院四十御賀」とあり、権記に(長保三年十月七日)「見右少弁輔尹伊賀守為義前越前守為時藏人道济等所進御屏風和歌」と、為義・為時・輔尹と並び、勅により和歌を提出している。「書御屏風四帖和歌十二首、左大臣三首、輔尹一首、兼隆三首、輔親一首、道隆一首令奏覽」(権記長保三年十月八日)と、道長以下の和歌を行成が書いている。詞花集は道長、後拾遺集は兼隆のその時の和歌を伝えてい、公任集にも宴の折の和歌が二首みえる。従って一連の屏風歌は、長保三年(一〇〇一)十月九日のものである。

81、92 権中納言殿の御屏風歌

この前の一連の歌が、藏人時代のものであるなら、藏人となった長保三年の権中納言は藤原斉信であり、長保四年には藤原隆家も加わり、長保六年には源俊賢がさらに加わる。67歌に長保三年三月日補之と注がある所を見、さらに次の93歌が長保三年二月四日まもない歌とみれば、その間におさまるこの屏風歌も、長保三年のものではないかと考えられ、権中納言とは杉崎氏のお説と同様藤原斉信ではなからうか。

93 入道中将のきみの御もとに消息きこえしおくに書きつけし

朝夕に見なれし君をおもふかなしら雪かゝる山をみなながら

入道中将という呼称は、権記に「日出到三井寺相逢入道中将」と

か「入道中将帰山云々」などとしばしば出てくる。公任集にも

。三井寺に入道の中將成信紅葉見にまうて給ふてかへるさに：

。よをそむきて長谷に侍りけるころ入道中將のもとより

。入道なりのふの中將のもとに

とあり、杉崎氏の御説と同じく源成信をさすと思われる。日本紀略によれば、長保三年二月四日に右大臣顯光の唯一人の息、左近少將重家と共に三井寺で出家している。成信は道長の養子で当時右近權中將である。行成の權記二月三日には「：夢中思得告出家由也：相逢權中將示夢趣中將咲云、正夢也」と記されている。伊務大輔集にも歌の贈答がみえ、新勅撰集には一条左大臣室の歌がみえる。当時のショックな出来事の一つであったのであろう。

94 藏人になりて右衛門督に殿ようさりまありて侍しに御物忘なりければあひたまはてようちふけて

藏人となった長保三年（一〇〇一）の右衛門督は公任であり、翌年から寛弘六年（一〇〇九）までは齊信である。歌から、藏人となつてまもない頃の作と思われるから公任であろうか。

96 院うせ給ひての春一条院桜のいとおもしろきをみて
千載集には同歌が、次の詞書であり、

一条院かくれたまふての又の年かの院のさくらを見て

と、院を一条天皇ととれば、寛弘八年（一〇一一）六月廿二日に薨去しているからその翌年の歌となる。が、「かくて一条の太政大臣の家をば女院領せさせ給て、いみじう造らせ給て、みかどの後院におぼしめすなるべし」（榮華物語みはてぬゆめ）と、東三条院が、

一条院を領したこと、詮子は「長保三年十二月廿二日：崩干行成卿第」（日本紀略）と、長保三年十二月（一〇〇一）に崩御していることからことは、千載集は誤りで、東三条院への哀傷歌と見ると、年代も合う。杉崎氏は、長保三年十一月に内裏が焼亡していたため主上の在す一条院の桜を見て、東三条院を偲ぶことは如何であろうかとされ、一条天皇への挽歌とみなすのが穩当とされるが、いずれとも断定できない。

100 ともかく山里にすまむの心なむはべるをいとよき山里あるを
いざたまへと聞へしかば少納言かくのたまふ

94、97、98、99が藏人の時の歌であることから、これもその頃のものであれば、少納言とは、杉崎氏は未詳とされるが、御堂関白記の長保元年（九九九）閏三月二七日、寛弘元年（一〇〇四）十一月十八日の条に小納言源伊頼と見えるので、兼明親王の孫、源伊頼ではなからうか。（寛弘二年の記事では源安隆が少納言であるが：）。

102 大学助とのあ所よりをみなへしにつけて

大学助も未詳とされるが、權記長保元年九月二四日（九九九）の記事に「頼貞任大学助」とあり、長保三年八月十一日（一〇〇一）の記事にも「：以大学助頼貞」とあり、十二月二七日には「：即令召藏人頼貞」と藏人となっている。長保四年三月七日（一〇〇二）では「今日御前堂童子経通、至光朝臣、道濟、頼貞」とあり、道濟といっしょの藏人である。その頼貞が、源満仲六男の帯刀先生頼貞であるのか、あるいは、醍醐帝皇子有明親王の子泰清の子（従五下、武藏守と尊卑分脈にある）であるのか、後者とは思ふもののもそれ単なる推定である。ここで思い起すのは江談抄の左記の記述で

ある。

源道濟為_二藏人_一之時、号_二藤原頼定_一、荒武威是也。称船路君云々
此人_不腹立_一之時甚_レ以優也。而性甚惡人也。仍_不可_レ向_レ之
船路者天氣和順之日。甚_レ以優也。風波惡之時。人_不可_レ堪_レ之
故称_二船路君_一

が、ここでは単に指摘のみに留めておく。

104 正月ばかりに中納言どのにて人々驚聞く心よみしに

藏人時代の中納言とすれば、公任、時光、惟仲、(実資)をあげうる。

105 二月のころほひ六条の右大臣へんにありしにやどもみなこぼ
ちてけり

六条右大臣とは杉崎氏と同様源重信で、歌から重信没長徳元年(九
九五)五月八日後ではなからうか。

106、107は花の歌、106は和泉式部集にみえる。

108 衛門督殿にて

右衛門督なら斉信、左衛門督では公任であろう。

111 左大臣殿にて惜夏月 112、113も同じ時のであるが、これら

は、歌合大成長保五年(一〇〇三)五月五日左大臣道長歌合にみ
える。

114、131 屏風に……

詞書により月並屏風歌と思われるが、いつ、誰のもとでのか不明で
ある。

132、143 鶯、耕作を始めとする題詠、あるいは前の屏風歌の一部
であるかもしれない。

144 河原院にて

これは拾遺集にあることにより、拾遺集推定成立年代寛弘初年以前
?のものであろうか。

146、155 早秋十首

156、165 題詠

166 屏風の絵にさくらの花みたる所

これは後拾遺集に

(東三条院)
おなじき御屏風の糸に桜花おそくさける所に人々のあるをよめる
とあり、167とあわせ、前述東三条院四十賀屏風歌と思われるが一
首離れてあるのは不審である。

168 陸奥守のもとへすまひのつかひにつけてつかはず

陸奥守は、杉崎氏の御説同様、橘道貞ではなからうか。和泉式部の
前夫で、権記によれば寛弘元年(一〇〇四)三月十八日に陸奥守道
貞の赴任が饒されている。赤染衛門集・公任集・和泉式部集などに
歌の贈答が見え、道濟と交りのある人々との交友範囲の中にある。

169、188 時雨、卯花、藤花……などの歌。171あなかにてふるさと

の花をこふるころ 182ふるさとをこふる 188九月ばかりに山里の

月を見るとある所を見れば、都ではない山里にいたときのものであ
ろうか。

189 寛弘五年七月或所屏風：

とあり、誰のための屏風かは不明であるが、年代は詞書に明らかである。

197 晩秋十詠に時主山家紅葉みる

207 夏夜三首思深夜月

210 八月十五夜左衛門督殿にて

211、212 同殿にて思野花と云ふ題を

189に寛弘五年という詞書があるところを見れば左衛門督とは公任であろうか。又、寛弘六年からの左衛門督は頼通であり杉崎氏同様公任か、頼通かというところである。

238 白川院に人々花惜にいでて歌を不詠てかへりしかば相模権守のもとにつかはす

233 相模権守にいひやる

234 かへし 相模権守忠隆

とあり、これらは、源忠隆に対する歌と思われる。三卷本枕草子七段勤物に

長保二年正月廿七日蔵人、三年正月右衛門尉使宣旨陸奥守従四位下満忠男、寛弘元年正月式部丞 二年正月叙

とあり、道済が一〇〇一年蔵人、一〇〇五年式部大丞、一〇〇六年従五下、下総権守となり、藤広業が九九七年蔵人、九九九年式部少丞、一〇〇〇年従五下筑後権守（公卿補任）、源扶義が九七七年蔵人九七八年式部少丞、九八〇年従五下遠江権守（公卿補任）という

他の例を考えれば、蔵人↓式部丞↓従五下、権守という定コースが考えられるので、忠隆が相模権守となったのも寛弘二年以後であろう。

232 白川院の歌をきゝて安波前司入道

小右記、御堂関白記・権記により、安隆、源方弘、藤原邦恒、頼方致郎、藤原伊祐などが安波守となっているが、阿波前司入道というにふさわしい人物は決めがたい。

235 長恨歌当時好士和歌よみしに十首。

桂宮本高遠集に同じく長恨歌の和歌があることで、おそらく高遠等と詠みあったものと思われる（このことについては後述）。桂宮本高遠集は、歌によっていくつかに大きく分類でき、長恨歌、楽府の和歌がおそらくは、大宰大式をやめさせられた寛弘六年（一〇〇九）以後のものであろうとは推定するものの、確証はない。（高遠1013歿）。

246 女への歌

254 霊山寺、東山、雲林院での歌

257 見庭前桜花贈立能日事也橘入道

橘入道とは、俗名橘永愷こと能因と思われる。能因集にも道済との歌の贈答が見えることは前述の如くである。和歌文学大辞典では、出家は、長和二年（一〇一三）ごろと推定されている。

258、259 三月五日大宮大夫斉信卿法代寺にて人々よみし二首

杉崎氏の御説の如く、斉信は長保二年（一〇〇二）二月三十日に中宮大夫（一〇一一年まで）にはなっているが、大宮大夫ではなく

長保二年二皇后宮大夫となっている公任の可能性も出てくるのである。

260 261 あひかたらふ人への歌

263 268 わづらふ頃山寺での歌

270、271 題詠

272 九月ばかりに東山橋入道がもとにてよる鹿のなくを聞きて

少くとも前述の如く出家後（一〇一三年）の歌である。

276 武蔵前司旁に聞蟄居之由遣之

武蔵前司も、杉崎氏は未詳とされる。武蔵守として、御堂関白記寛仁元年（一〇一七）十月四日の条に

行桂家（繁子）従女藤三位許云 武蔵守頼貞宅者申文云 手作布干端

進上 是造宮料 進……家 可被為造宮者 依極無便 即返送

と、道長とあまりうまくいっていなかったことが推量され、蟄居することも考えられるが当時、道済は筑前守として京にはいなかったと思われる。

又権記には、長保二年七月二五日（一〇〇〇）の条に

阿波権守来示云昨日有慎籠侍之間 前武蔵守寧親朝臣郎等推入

济政宅 忽成監行 帶弓箭者数多出来斗争 即寧親郎等 被疵

是即寧親従者誤射者……

結局この事件は、長保三年七月十七日（一〇〇一）

先日依仁和寺申任右京少進之藤原致与依去年出日济政宅殺害武

蔵守寧親従者之事 給追捕宣旨者也 云々

と、武蔵守寧親の従者に追捕宣旨が出て片がついているが、このことも、蟄居の要因にはなりそうであるが、断定はできない。

279 283 山家早春五首

284、207、295 山寺にて

286、289 294 人に

298 306 秋から春にかけての山里での歌

307 いくべきよしをいひてさはる事ありてとまりしかば

この歌は能因のものと思われる。能因集に

秋つのくに……たりて道济朝臣のもとにくたらんなどもいひしものをなと思てかういひやる

夏草のかりそめにとてこしかともなにはの浦に秋そくれける

さはることありてくちおしうなといひてかうかへしたり

心にもかなはぬものは身なりけりしられもきみに契りけるかな

とありあとの歌は、道济集308にある。能因は「出家後撰津のなにわや児屋池畔に居を卜し」（和歌文学大辞典）とあることから、能

因出家後の歌であり、またこの近くに道济の山里なるものもあつたのであろうか。

304 山寺にこもりたるあひだに雪ふる日（蕃）玄蕃助がもとへ

玄蕃助とは、杉崎氏と同様、源為善と思われる。道济の父の兄国盛の子にあたり、四位備前守となり勅撰集に8首歌がとられている。

権記寛弘八年一月九日（一〇一一）の条、小右記長保三年十一月二八日（一〇〇一）の条、五年一月二九日（一〇〇五）の条に玄蕃助

源為善と見える。

309 つくしにてイロ舞了が飲了は許にきぬ遣はずとて

筑前守となった長和四年(一〇一五)二月十四日以後のものである。
飲了は未詳。

310、311 住吉にての歌

312、313 筑前での歌

以上の年代がほぼ明らかになった歌を图示すれば、
歌の番号 年月日

1・2	1001?	105	995
4	986 6 又は 988 4 26 以後	111	1003
5	990 以後	114	1004 頃?
39	996 以後	166	1001 10 9
49	998 以後	168	1004 3 18 以後?
64 67 69	1001 秋	189	1008 7
70 78 80	1001 10 9	233	1005 以後
93	1001 2 4 以降 冬又は春	258	1002 2 30 以後 1011 6 13
94	1001 1 30 以降	257	1013 以後
96	1002 春又は 1012 春	309	1015 2 14 以降
		312	
		313	

二、三の例外を除き、年代をほぼ追い歌も断続的ではあるが、やゝまとまりをみせていて杉崎氏が言われる如く、「大体年代順に歌が

排列されてあるやうであるが、所々排列が乱れている」といえる。その他の各人物考証も一応年代順という仮定のもとに推定したものであり、それ以上のものではない。

四

道済の公けの世界、まず文人としての道済の場は次のようである。

本朝麗藻	本朝文粹	題	主権者	その場の文人	年月日	道済官位	根拠
暮春陪都督 大王遊覽法 興院	初冬泛大井 河詠紅葉 花和歌序	源重光?	郭道親王		1007 以前		麗藻注
水樹多佳趣道			長右金吾		999 5 7 以前	宮内少丞	御堂関白記
禅林寺眺望			齊名		999 以前	宮内少丞	句題抄の序文
秋声多在山			具平親王 積善・為政		989 以前	文章生	詩と文粹の序文
山晴秋望多			藤士大夫 惟成・齊名		999 以前	宮内少丞	文粹の序
園菊飽霜花			齊名		999 以前	?	文粹の序
霜樹疑春花			裏 忠輔、齊信		1001 10 23	宮内丞	権記
水清似晴漢道			長 右府、左金吾 吾、右金吾 有、積善 孝道、積善 以為政、宣義		1004 9 12 以前	式部少丞	御堂関白記
庭花依旧開					1010 以前		句題抄の詩

他にも現存してはいないが1002年内裏で瑤琴治世音の序文、初蟬
 繞一声の詩を作っている（権記）。道長や内裏、親王亭をはじめ、
 権門第で他の文人と詩を作っているが、年代のわかるものだけでみ
 ても宮内丞のときのものが多い。別表を参照すれば、道済の文人と
 しての位置がどの程度に認められていたか——正しくは、あまり公
 宴には名を出していないこと——がわかるであろう。そして、当時
 の詩風がどういふものであったかも。

和歌では 首

歌 合 5

中納言の君の御もとにて。長保5年5月15日道
 長歌合

屏風歌 60

東三条院屏風歌、権中納言屏風歌、寛弘9年屏
 風他

その他 20

48左大臣殿の秋花御覽せし御供にて、62宰相中
 将にて、94右衛門督殿にて、104中納言殿に
 て、105六条右大臣殿へんに、108衛門督殿に
 て、210左衛門督にて、215大納言殿大井追遙
 38二月つごもりごろ左衛門督殿、258三月五
 日大宮大夫法代寺にて、100少納言……

計 85

それぞれの権門が誰をさすかは一応の推論をしておいた。公けの席
 での歌と、詞書ではつきり決められるものだけで、少くとも85首で
 家集の4強である。

五

次に、道済の私の世界をしてみる。家集が厳密な年代順ではない
 けれども、おおよそ年代を追ひ、類別的に並べられていることは前
 に述べた。家集の前の方には、しみじみとふる里を詠んだ歌がある

ふる里をこふる心の中にてよみし

31 忘れてもあるべきものをふるさとのけさあけぼのの夢に見え
 つる

ひらの山にのぼりてふる里をおもふ心を

38 ある時はうきことしげし故里にいそぐやなにの心なるらむ

春ごろゑ中よりのぼるとて

56 見渡せば都はちかくなりぬらむ人の心ぞかくれざりける

あとにも

ふる里をこふる

182 老ぬればすぐる月日もあらはれてまづ故里ぞ恋しかりける

ゑの中にてふるさとの花をこふるこゝろ

171 かつ見てもあかずおぼえし故郷の花の盛りにとほく来にけり

たびのかりをのぞむ

199 雁がねもふるさと遠くなりけり我が心をぞ空にしりぬる

この他にも、7 26 71 105に見える。ふる里は、31 38 56 171の如
 く、ふる里以外のゑの中にて、「あけぼのの夢に見える」までに恋し
 く思われた。「花の盛りに遠く来にけり」、花の盛りのふる里、そ
 れは単に花のみをさすのではなく、家族に囲まれた暖かい家庭をも
 含めた心のふる里でもあったにちがいない。「ある時はうきことし
 げきふる里」ではあるが、「老ぬればまづ」思出されるのは故里で
 あった。38の詞書と、56でゑの中と都とが対比されている点、この場
 合の故里とは都をさすのかもしれない。7は、昔なじみの地、26
 は、父源方国が能登守であったことへ勅撰作者部類Vを考えればこ
 のふる里は、能登であろう。

ふる里と前後して親のことを歌う。

或所にて聞郭公よしみしにおやの服なるとしにて

34 いにしへにことにもあるかな郭公物思ふ時は声かはりけり

服なりし時かたらふ人みた(以下欠)

43 思ふこと言へば少しは慰むをいつまで君に言はじとすらむ

なくなりたるおやの夢にとなどいひしかば

45 よは異になりけれどもたらちねの同じ様にて夢に見えつる

おやのなくなりたる頃山寺にて仏供養してかへるみちにて

46 かへりては先たらちねを見し物をけふは誰かはあはむとすらむ

おなじころながむなどしてつれづれなりしかばおなじおもひなる人のもとに

47 身はことに色はおなじきふち衣袖にてしりぬおもふ心は

46 はことに悲痛である。家に帰っては一番最初に見た親であるのになくなった今はいったい誰が会おうとするのか、たらちねを失った

極まりない悲しみが痛いまでにこめられている。それほど親に対する愛情が深かった。唐代に他に比すべきものがなかった程の栄達を

なしたげた大政治家、文豪の張説の如く、と願ってくれた親であったのである。

たらちね、それは前のふる里と、少くとも重りあう部分があるに

ちがいない。

ふる里と親、そしてまた道済は、故人、知人をよく訪ねた。

山里にしりたる人たづねにいきたりしにあればて人もなかりければ

50 隣さへ絶えてなくこそなりにけれ誰にかとはむ住みし人をば

あひしりたる人のもとにいきたるに家にむかしのまゝにてあるじのなくなりなければはしらにかきつく

7 古里に人だにあらばとふべきを紅葉の道も埋もれにけり

「昔みし宿」、今は「隣さへたえて」なく「紅葉の道に埋もれた」「古里」への限りない哀感である。「かきつく」という行為の意味については後述する。本朝麗藻にある道済の次の詩でも、同じ姿勢が指摘できる。

54 昔みし宿はかはらすありなから主はなくもなりにけるかな

おなじころなくなりける人のとぶらひに山ざとにいきたりける人もなければかきつく

暮春陪都督大王遊覽法興院。同賦庭花依旧開應教以春為韻

家移為寺謝鸞塵 依旧花開憶主人

芳意寧將前日異 濃粧或有每年新

容輝樹老雖非昔 雨露思遺不忘春

宜矣大王臨望處 今朝思昔動精神

法興院は兼家の二条の別邸で、大鏡には

この殿法興院におはしますことぞ、心よからぬところにぞと人

はうけ申さざりしかどいみじう興せさせ給てきゝもいれでわた

らせたまひてほどなくうせさせおはしましき。

とあり、栄華物語には、兼家は東三条院でなくなったことになって

おり

これこそはかぎりの御ことなれとおぼしきはがせ給ひて二条院

をばやがて寺になさせ給ひぬ。

と、兼家死後、法興院という寺となっていて少しく相異がある。

藤氏繁栄の大もとたる兼家の別邸も、今は、「容輝樹老雖非昔、雨露思遺不忘春」という現実である。あらゆる悪も善も、すべてを朽ち果てさせる歴史をたどる道済の視線は遠く長い。それは当時の仏教思想と無関係ではないにしても、彼自身の内なる切実な実感なのである。それにもかかわらず、いや、それだからこそ、親、ふる里、故人、自然、特に花への限らない哀感があるのである。

道済の代表的な歌として、拾遺集・三奏本金葉集・今昔物語・後十五番歌合・新撰朗詠集などにとられていた次の歌は、そういう意味でいかにも道済らしい。

河原院にて

144 行末のしるしばかりに残るべき松さへいたく老いにけるかな

伊勢物語八十一段（古典大系）には

むかし左の大臣いまそかりけり。賀茂河のほとりに六条わたりに家をおもしろうくつくりて住み給ひけり。……略……この殿のおもしろきをほむるうたよむ。そこにありけるかたるをきな、いたじきのしたにはひありきて人にみなよませはててよめる。

塩亀にいつか来にけむ朝なきに釣する舟はこゝに寄らなむとよみけるは。……

と、ある如く、河原院は陸奥塩竈のさまを邸内に移し、豪壯をきわめた源融の邸である。源順は、本朝文粹の河原院賦で

其始也軒騎聚門 綺羅照地常有笙歌之曲 間以戈鉤為事
夜登月殿 蘭路之清可嘲 晴望仙台 蓬瀛之遠如至

と記している。源融時代の河原院の繁栄から、たゞそれがあつたというしるしばかりに松だけが残っている現在、そして、その松さえ

も老いているという、ずっとずっと昔から今に到るまでの時の流れ、やがてはその昔のごとくに朽ち果ててしまふにちがいないといった人間の営み、時の流れ（それは道長の榮華をさえも含んでいようか）に、彼の目は注がれているようである。

また、松とは道済自身でもあるかもしれない。かつて祖先は光孝天皇であつたその系譜に継がる今のしがたない、すっかり老いてしまつている自分であるとの感懐——それらをも含めてこの歌は、現実に対する寂寥感・無力感以外の何物でもないであろう。そしてそういう時に対する認識は、現実に対してはむしろ消極的な生き方しか選ばせないであろう。

ここに、かきつくという行為の意味が注意されるのである。もう一度詞書をあげれば

おなじころなくなりける人のとぶらひに山ざとにいきたる人もなければかきつく（道済集7）

あなかへ下りける人のもとにまかりけるに待らざりければ家のはしらにかきつけゝる（後拾遺集33 道済集9にはかきつけゝるとはしない）

あひしりたる人のもとにいきたるに家にむかしのまゝにてあるじのなくなりければはしらにかきつく（道済集54）

また、次のように家集にかきつける例もある。

元輔が集かりてかきつけし

玉章に心のうちは知りにしを身はいづかたのけぶりなるらむ（道済集5）

ある人のもとから実方君の集をおこせたりけるにかへすとてかきつく

なき世にはかたみなりける玉章を昔はさしもおもはざりけむ（道
濟集49）

前の三例のかきつくには、書き付けずにはいられない彼自身の内なる
哀感があるにしても、いささかそこには歌人臭が漂っている。

人の許にしばしばまかりけれどあひかたく侍りければものにか
きつけ侍ける

在原業平（古今 627）

くれぬとてねてゆくへともあらなくにたとるたとるもかへるまき
れり

うためしけるときに奉るとてよみておくにかきつけてたてまつ
りける

伊勢

（後撰 1000）

山川のをとにのみきくもしきを身をはやなから見るよしもがな
式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるをいくばくもあ
らで女みこの身まかりにける時にかのみこすみける帳のかたび
らのひもにふみをゆひつたりけるをとりてみればむかしのて
にてこのうたなんかきつたりける

かずかずに我をわすれぬものならば山のかすみをあはれとはみよ

（後撰集 857）

などのように、実質的な意味の伝達のためのかきつくではなくて、
道濟集7、54の場合は、かきつくこと自体が自給自足的目的なので
ある。

人のとふらひにまうてきたりけるにはやくなくなりにきといひ
侍ければかへてのもみちにかきつけ侍ける

戒仙法師

すきにける人を秋しも問からに袖はもみちの色にこそなれ

（後撰集 1414）

とある如く、道濟は戒仙法師の系譜にあるといえる。

ここに私は、三十六歌仙のうちに入っている公忠、信明の孫とい
う道濟の、重代にわたる歌人意識を見る。それは、

3 人々長閑寺にありきて残花をたづぬといふ由よみしに

36 山のさくらをたづねて

40 法輪にまかでてこれかれ歌よみしに

255 東山に郭公をたづね

256 雲林院

144 河原院にて

14 花をたづねてほどをしらずといふ心を

59 ある所にて四月のつごもりかた郭公きかぬよしよみしに

146 155 早秋十二首

197 206 晩秋十詠

207 209 夏夜三首

279 283 山家早春五首

12 月のあかきよ人々歌よみしに

といった百三十余首を占める風月を詠んだ歌の多さともかわりあ
うであろう。同じような境遇にある人と歌を詠みかわすというだけ
でなく、彼には自分一人が風流のわかる者という自負が、表われて
いるようで次の歌はおもしろく思われる。「惜しみける人」があっ
たことは驚きであった。

もみちたづねに人きたる山里にいきて

33 惜しみける人もありける紅葉ばのぬしなき山に尋ねけるかな

かきつくの後の方の例では、元輔や実方といった歌人に対する敬意である。左大臣師尹の孫で、当然榮達が期待できた立場にありながら、突然陸奥守として受領に下った実方という多感で多情な歌人の名譽が、「昔はさしも思」われなかつたこと——これは道済にとつてはゆゆしき出来事であつたであらう。彼にとつては、かけがえのない歌人の名譽なのである。

白川院に人々花惜にいで、歌を不詠てかへりしかば相模權守のもとにつかはす

230 しら川の花の心ぞはづかしきおほくのとしの春すぐしけむ

こゝでは枕草子九九段（古典大系）を思い起す。

元輔が後といはるゝ君しもや今宵の歌にはづれてはをる
という定子の歌に対し、清少納言は、

その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよまましと返した。元輔の子といわれる身であるからかえて清少納言はなまはらかな歌を詠もうとしない。公忠、信明の孫でありながら、白川院に花を惜みに行つて歌を詠まないで帰つてきた、そこには、重代の歌人としての恥の意識——清少納言と共通の意識があつたと思われるのである。かえて歌を詠まなかつたこと、それは、彼が、彼自身の歌人たる名譽を重んじていたせいだともいえるのである。やがて、風流にあけくれる——風流韻事を旨としたがる道済をみる事ができる。

ともかく山里にすまむの心なむはべるをいとよき山里あるを

いざたまへと聞えしかば少納言かくのたまふ

100 朝夕に心をやりて山里に花見むほどを思ひこそやれ
とある御返し

101 そよそよ君や来ますとかねてより心のうちに花ぞひらけぬ
この前後には、藏人になつた時の歌がみえる。

藏人になりて右衛門督殿にようさりまありて侍りしに御物忌なりければあひたまはでようちふけて

94 天の戸にさしこらしてや小夜ふけてたゞよひあるく雲の上人
とあるかへし

95 蘆たづの雲の上にはかよへどもふるす忘るゝときはなき哉

藏人以前は、傍点部分に注意すれば公任にでも仕えていたのだろうか。前歌も、少納言とかかわりあう藏人時代のものではなからうか。晴れの殿上人たるの名譽にもかかわらず、彼は、山里に住まむの心を持つ。彼は、また

藏人になりて侍りしに秋南殿にて月を翫びはべりて

67 よそなりし雲のうへにてみる時も秋の月にはあかずぞ有りける
と詠んだ。少くとも道済は、

寛平御時きくの花をよませたまうける としゆきの朝臣
久方の雲のうへにてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

このうたはまだ殿上ゆるされざる時にめしあげられてつかうまつれるとなん (古今集 269)

と詠んだ藤原敏行のように、そこにいささかの誇張はあるにしても昇殿の喜びを、あまつ星とまでは感激しなかつた。殿上で見る月もよそ（地下）で見た月も、同じく「あか」ない月としか表現しない。

彼の公けの場での漢詩が、宮内丞、式部丞などの時に作られていること、又、現存してはいないが、権記（長保三年九月二三日・長保五年六月二日）によれば、内裏詩会の霜樹疑春花、瑤琴治世音の序文は、忠輔、斉信、有国、道長といった同座の文人の中で道済が作ったと記されていることは、「叨作唱首之人」（秋日於河原院賦山晴秋望多 惟成 文粹卷八）という序者としての惟成の謙辞を思い浮べる時、序者たるもののある程度の比重がわかるであろう。藏人としての殿上人たる名誉、文人としての序者たる名誉（記録によるかぎり三度であるが…）にもかかわらず、彼は山里に住まむの心を持つ。それは

おなじころほひうへにて（注長保三年三月藏人のとき）

68 秋のよの月の心にしみぬれば身のうちさへそさやけかりける

深山月

201 心こそあくがれにけれ秋の夜の夜ふかき月をひとり見しより

山家月

23 さびしさに家でしぬべき山里をこよひの月に思ひとまりぬ

草花をみる

161 花みれば物思ふことも忘られぬ秋は野べにて住むべかりける

といった、秋の夜の、山里のさやけき月、そして野べの花といった俗をはなれた世界への志向のため、それは「春にあはぬ人にあはじと思へばやよそなる花も遅く咲くらむ」（道済集13）といった述懐にも裏うちされているのであろう。四季折々の風物を詠んだ歌の多さ、それらが高じた、山里の風流へのあこがれである。では、実際の山里の生活はいかなるものであろうか。

本朝麗藻に、閑居無外事という道済の詩がある。作詩の場、年代等は明確にはしがたいが、内容は、はなはだ興味深い。

閑居謝遺繫響 況亦更无外事營
得意詩朋懸榻待 移權軒蓋過門行
性慵唯見籬花色 官冷不驚衙鼓聲
身適自由依卜靜 追嘲奔走買虛名

傍点の部分に注意すれば、このとき道済は、閑居に自由な生活をしてきたのだから、寛弘七年に下総権守の任があけてから五年のブランクの時代の作ではなからうか（長和四年には筑前守に任じられている）。権門に移る軒蓋が、門を過ぎてゆく音を、彼はうとましいと思う。そして奔走して虚名を買うやからをあざけり笑う。その語調の強さはとりもなおさず、彼がそれらからまだ超越できないでいること——彼の執着もそこにあることを物語っている。（後に寛仁二年には、道済でも、従五位上を受けるほど道長につくしたことは前述した。）虚名に奔走するやからに対し、自分自身はといえば、詩朋と詩を語らい、閑居にただ籬花の色を見ているだけだという。そこは、道済の「禅林寺眺望」風に言えば、毀誉が聞えてこない世界である。道長のもと、確実に動いている現実というなまましい世界に対して、彼は自分はそのうき性であるからただ見ないようにし、耳をふさいで、唯、花と詩とを朋としているのだという。ここに彼の本来的な歌人たる志向があったのであるが、それにしては追嘲奔走買虚名と語気が強すぎる。それは世相への激しい批判ゆえのものなのである。ここに100、68といった殿上での歌の意味も、単なる風流へのあこがれのみではなく、世時批判ゆえのものであるこ

とがようやくはつきりしてくるのである。

歌集後半には山里での歌が多い。

八月十六日山寺にて京なる人に

265 よそながら君やみるらむ思いつゝ今宵の月に寝であかしつる

八月ばかりに山ざとにて三首萩花

266 萩の花明けもはてぬに折りつればこぼるゝ露に袖ぞぬれける

見山月

267 片岡のしばとを明けて山の端にいよいよ出づる月をみるかな

わづらふ頃山寺にて

268 昔みし人はこねどもなかなかにちぎらぬ月ぞわすれざりける

以下 273、279～306 の 30 首あまりである。山里の月、紅葉、雪の讃

嘆である。山里、山寺で行きついた所は、

さくらの花ざかりに山ざとにれいなき人あるに

286 よそなれぞ心はしりぬ山里の花のさかりに住む人やたれ

山寺僧房の前新闕伽泉

287 流れいづる心はしりぬ秋の夜の月ぞやどれる山の井の水

山里にある人をかたらひてときどき通ふにまたおなじ山ざと

のちかき所にもものするあひだにていひたる

302 山里の外にぞますときく時は心のほどを知らずぞ有りける

その心とは、山里の花の盛り、又、僧房の闕伽の山の井の水に求めることのできる、人心なき、世をそむく境地である。

また、道済には花の歌、花への哀惜の歌が多い。

或所に落花を思ふといふころよみしに

106 散りにける花の心を知らぬかな見てすぐしけむ人に問はばや

103 ひとへだに花の心は知りぬればなべてのへ秋を何にたとへむ

としばしば花の心を知るといふ。はかないものへの哀惜である。

花の中でも卯の花が多い。

卯の花をたづぬ

35 卯の花の咲けるあたりを尋ねればしらぬ宿をもしりぬべきかな

五月うの花

172 卯の花に咲きこめられて山里にこひし都もわすられにけり

こしばがきにあをきつたなどはひたるに雪ふりかゝりければ

224 卯の花の見えもするかな山里のかきねに降れるけさの白雪

等々、卯の花とは山里の花、「山賤の垣ほに咲ける」花である。み

つねは「昔見し我故郷は今も猶卯の花のみぞ目には見えける」

と詠んだ。念願の山里こそは、新しいふる里として道済がみつけた

居住地でもあったろうと思われる。山里での人との語らい、風流そ

こに道済の念願があった。山里は人里離れたむくつけきな人の世界ではない。

得意詩朋懸榻待

(麗藻 閑居無外事 道済)

と、友人徐穉以外は腰かけを片づけて客に接しなかった後漢の陳蕃の故事のごとく、俗を離れた世界での詩の語らいである。白楽天の閑適の詩の世界である。

白河殿に道済朝臣とふたりゆきてふりうおかしきさまよまむ

といひて

としふれはまつおひにけりはるたちてねのひしつへきねやのうへ
かな（桂宮本能因集）

にも同じ傾向がみえる。そして彼自身、たびたび自分を好事者とい
う。

長恨歌当時好士和歌よみしに十首養在深窓

236 玉だれの簾もすかぬ閨の中にきまましけりと人もしらすな

以下245歌までは長恨歌の和歌である。本朝麗藻の道済の冬日於雲
林院西洞同賦境静少人事の詩でも、自分をも含め好事者という。

長恨歌の和歌は、藤原高遠集、道命集にも見出すことができる。

或人の、長恨歌、楽府のなかにあはれなることをえらひいた
してこれかこゝろはへを甘首よみてをこせたりしに

養在深窓人未識

からくしけあけてしみれはまとふかきたまのひかりをみる人そな
きをはじめとする高遠の36首

長恨歌のうた、人のよみはへるに

ありとたにかてきくけむまとの中に人にしられてとしへたるみは
以下二首をもつ道命阿闍梨集により、好事者同志の新しい和歌の試
みである。もち論、句題和歌は、すでに大江千里集に見られ、長恨
歌の和歌も伊勢集に

長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひてその折々をよませ給ひ
けり御手にて

紅葉に色見えわかで散る物は物思ふ秋の涙なりけり

と、前例はあるけれども、それぞれの、意味は異なるのである。太
政大臣実頼（清慎公）の孫でありながら、結局は勢権競争から落さ

れ、弟である実資（実頼の養子となる）、懐平にさえも先をこされ、
歌人であること、そして笛の名手であることに命をかけた高遠の生
を思う時、長恨歌、楽府の和歌化というすきもの同志の新しい和歌
の試みが設けられたこと、それは単なる偶然とは思われない。同じ
くすきもの、河原院（国語と国文学昭和42・10河原院の歌人達大
養廉氏）、雲林院などでのふりう、それも不遇ゆえに閑居でふりう
を求める彼ら一連の好事者意識なのである。

ところが、山里の歌の詞書に注意すれば、

263 わづらふころ人のもとに

264 八月ばかり山里にあひしれる人を尋ぬとて

265 八月十五日山寺にて京なる人に

266 八月ばかり山ざとにて三首萩花

267 見山月

268 わづらふ頃山寺にて秋月をみて

の如く、263～268歌までは、病気のため八月頃に一時的にいたもの
のようである。

279～283 山家早春五首

286 さくらの花ざかりに山ざとにれいなき人あるに

289 山里にて紅葉をみて

295 山寺にて月をみる

ものいふ人に

298 わぎもこに見せてやけなむ山里の紅葉の上のけさの初雪

しのぶ人に

299 人心なき世をそむく山里に空かきくらし初雪ぞふる

また

300 山里のもみぢにふれる白雪は花桜とぞみえまがひける

また人に

301 都には降りやしぬらむ山里の路もなきまで積る白雪

山里にこもりたるあひだに雪ふる日玄番助がもとへ

304 夕されば寒さやまさむ山里のかたちの岡にみ雪ふるなり

正月五日

306 我が袖に春ぞしみぬる山里のうめがかすへる秋のすゝきは

279～283 の山家早春、286 の春の山里、298～306 は、紅葉の頃から、雪、せいぜい正年五日までの一時的な山里居住であったと思われるのである。(これは詞書にのみ偏した少し厳しい見方であるかもしれないが…)そして家集を占める公けの席での歌の多さ、結局、道済は、山里の生活を捨てて、筑前守という受領、官僚として世を終えたのである。

また、私は次の歌に注意する。

九月ばかりに山里の月を見る

188 雲の上にもかきさやかに見し月を時雨のみする谷がくれかな
彼が、藏人となって殿上して月をよんだ歌、(前掲67歌)では、殿上で見るがゆえにめでたき月とは表現せずに、地下のとき見た月と同じく美しいと詠んだ。が、地下となってみた月は188の歌では、

やはり殿上の月であったがゆえに、「昔さやかに見し月」として

「時雨のみする」現実と対称的に、憧れて思い起されるのである。

念願の山里ではあったけれどもやはり心は穏やかではない。それは閑居無外事の語気の強さとも相通う。おそらく山里での生活は、例の無官の時代のものであろう。

では、山里でのふりうとはそれだけの意味しか持たないであろうか。

貫之は、古今集序文で、和歌が色好みの方に埋れることを嘆き、漢文学と同じく和歌を公けの晴れの場に持ちこむことを試みた。また一条天皇時代の「当時名儒」(小右記)大江匡衡は、

若無惟月思光至 筆路詩場定寂寥

。今月八月十五日夜事湯葉以在江州 不見漢宮之月 不見梁園

之月 不聞鳳琴之声 不聞龍笛之声 我雖飯風月之名 於風

月之席 因縁淺明矣 (江吏部集上)

にあるごとく、匡衡が云う風月とは、漢宮(宮中)、梁園(親王邸)での風月であって官を離れて一人閑適を愛した白楽天等とは本質的に異なる。あくまで官情を重んじ、恩光の至ることなき詩場は、「寂寥」とまで言うのである。公けの風流によって、官位を、名を得ようとするのである。実際、寛弘三年三月四日左相府東三条第での花宴では、匡衡が、序者となりそのことにより息挙周は、藏人に補されているのである(御堂関白記、江吏部集65)。匡衡は、その感激を「風月以來 未嘗聞此例時人榮之 不堪感躍」と記している。(江吏部集)

こういう点で、道済は明らかに貫之や匡衡と異なる。ふりうは格々しき公宴ではなくひそやかな山里の詩友との語らいの中にあるという。彼が、河原院に集う歌人の一人であったことも単なる偶然ではない。

それは、公けの場から拒否されたゆえの山里でのふりう、とばかりは云えないのではなからうか。

こ・こ・ぬ・か・の・宴・に・ま・づ・難・き・詩・の・心・を・思・ひ・め・ぐ・ら・し・暇・な・き・を・り・に・、
菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとみに……

(源氏物語 帚木)

とあるように公けの詩とは、「詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす」(毛詩序)如き詩ではなく、題意と、主催者への祝儀性とを織りこんだ、でっちあげるべき詩、後表の「燕雀相賀」「野無遺賢」の如き、齒の浮くような為政者への媚に満ちた嘘の世界での、華やかな詩題、又、そういう詩の世界なのである。光島民子氏も挙げられたように(女子大國文46号)寛弘四年三月廿日道長第作文会 林花落灑舟 以風為韻

・ 花落林間枝漸空

多看漠々灑舟紅 (道長)

・ 春暮林花枝漸空

紛々散落灑舟中 (以言)

・ 花滿林梢映碧空

落來片々灑舟紅 (積善) 本朝麗藻

の、このようなあからさまな類似は、当時の詩壇のみならず、政界内にも於る明らかな腐敗ぶりを示しうるであろう。

道済は、こういう意味で、光孝源氏という、また、重代の歌人と
いう矜持において「燕雀相賀」(長保二年十月十七日内裏御庚申詩

題)公宴の風流、また、社会を拒否したともいえる。それは、殿上人であつても山里への傾きがあつたことから指摘できる。ここに私は前にあげた江談抄の船路君と称せられた気性の激しさをみる。が、彼の山里での風流の生活は一時的そしていささか観念的・理想的なものであつた。

道済には残りの花の歌が多い。

十月ばかりに人の家に

18 ほかなるはかれはてにしを惜み置ける菊に心の見えもするかな

絵に山里に花をしみがほなる所に

20 山里に散りはてぬべき花ゆえにたれとはなして人ぞまたるゝ

のこりの花をおもふ

176 香をだにも衣にいかで移してむ残れば花はけふもこそ散れ

もみちたづねに人來たる山里にいきて

33 惜しみける人もありける紅葉ばのぬしなき山に尋ねけるかな

山里に人家ありもみちはつかにみはやしに霧たちこめて

89 あらしのみ吹く山里のもみちはつかに霧立ちこめて來る人のなき

「くる人のなき」「紅葉ば」、「散り残る花」、「ぬしなき山の紅葉」

「山里に散りはてぬべき花」、ことに20歌は、山里で誰にも気づかれずに散り果ててしまう花の運命だからして、よけい誰か見て

くれる人が待たれるのである。

山里に散りはてぬべき花とは、実は、道済自身のことのようにも

思える。山里に散り果ててしまう予感があつたからこそ、ここに

かきつくの意味が、そして、はかない人事、花への哀惜の念が再び

思い起されるのである。

直接政界の渦のまん中にまきこまれる不幸から免れた幸いがゆえに、亡き歌の河原院の歌の如く、客観的に歴史―時―の流れをみつめる道済の目が育てられたといえる。それゆえに、しみじみとした情趣深い、実感あふるる詩情は、まさしく彼のものであり、またそれだけの力量を持った歌人として、道済は新しく見直されるべきだと思ふ。

彼の山里への志向は彼にあっては一時的ではあったが、やがては閑居無外事の世相への激しい批判はともかく、その歌人としての志は友、能因にまさしく受けつがれ、やがて日本の伝統的な詩人のスタイルとなっていくのである。

年月日	作文の場	詩題	出題	序	韻	作品
長保 1 1 1	東部大卿相公陪吉祥院	古廟春方暮	以言	為政	清	(文)(麗)以言
長保 1 1 1	道長第作文	水樹多佳趣	齊名	匡衡	賢	(江39)(麗)公任、道濟
長保 1 1 1	道長第作文	避暑對水石	匡衡	賢	賢	(江17)(文)匡衡
長保 1 1 1	道長第作文	池水如對鏡	為政	清	清	(江36)
長保 1 1 1	內裏御作文	寒花為客載	齊名	匡衡	心	(江130)(文)匡衡
長保 1 1 1	左大臣殿作文	菊是為仙草	匡衡	信賢	賢	(江122)
長保 1 1 1	重陽宴	澤如時雨	匡衡	信賢	賢	(江122)
長保 1 1 1	左大臣遣長第作文	冬多積雪	匡衡	信賢	賢	(江122)
長保 1 1 1	擬文章生試	花色與春來	輔正	伊衡	新	(文)匡衡(麗)有国
長保 1 1 1	內宴	花前樂	輔正	伊衡	新	(江124)
長保 1 1 1	重陽宴	受天祿	保光	資忠	賢	(江13)(麗)中書王
長保 1 1 1	具平親王亭詩會	寒林暮鳥歸	成忠	成忠	賢	(江13)(麗)中書王
長保 1 1 1	省試	松院新栽小	成忠	成忠	賢	(江13)(麗)中書王
長保 1 1 1	藤相城北山莊	淡交唯對水	成忠	成忠	賢	(江38)
長保 1 1 1	員外大納言文亭	夜坐聽松聲	成忠	成忠	賢	(江9)
長保 1 1 1	又召擬文章生奉試賦詩	池岸菊猶鮮	成忠	成忠	賢	(江118)
長保 1 1 1	天皇行幸東三条第詩宴	葉飛水面紅	成忠	成忠	賢	(江118)
長保 1 1 1	御書始	受天祿	保光	資忠	賢	(江118)
長保 1 1 1	文章生試	翫水辺紅葉	保光	資忠	賢	※和歌序時文
長保 1 1 1	巴融法皇大井河三船の御遊	秋情月露深	保光	資忠	賢	(江6)
長保 1 1 1	右近衛員外曲相亭守庚申	昭華玉	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	省試	春雪呈瑞者	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	美賀第作文	賀春雪	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	後涼殿南葺作文	春雪呈瑞者	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	文章生試	蟋蟀待秋吟	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	擬文章生試	野無遺賢	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	天皇幸太政大臣閑院第	三月盡詩	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	公宴	春色雨中盡	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	公宴	豐年至	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	擬文章生試	踐露知暑	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	文章生試	鶯啼宮柳深	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	內宴於淑景舍	國安民治	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	文章生試	隔水花光合	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	太政大臣移座花下賦一絶	文章生試	齊光	齊光	賢	(江6)
長保 1 1 1	在衡栗田山庄尚齒會	文章生試	齊光	齊光	賢	(江6)

長保	年月日	作文の場	詩題	出題	序	韻	作品
	1 6 ?	左衛門權佐惟宗允亭講令 賦詩 <small>(紀)</small>					
	1 9 9	重陽御物忌殿上作文 <small>(小)</small> <small>(権)</small>	草樹減秋声 <small>七言六韻</small>			聞	
	1 9 10	御書所作文 <small>(権)</small>					
	1 9 10	御前作文 <small>(関)</small>					
	1 9 13	内裏作文 <small>(権)</small>	菊開花盡遍	忠輔	広業	鮮	
	1 9 9	為尊親王御作文 <small>(権)</small>					
	1 9 30	内裏御作文 <small>(紀)</small> <small>(権)</small>	送秋筆硯中	匡衡	匡衡	心	(江23)
	1 10 7	為尊親王御作文 <small>(権)</small>	唯以詩為友	匡衡	匡衡	情	(江5)
	1 10 21	於宿所作文 <small>(権)</small>	夜寒思山雪	広業		冬	
	2 3 2	道長土御門第作文 <small>(権)</small> <small>(関)</small>	花影滿春池				(江19)
	2 9 24	内裏御作文 <small>(権)</small>	木葉落如舞	匡衡	孝標	深	(江17)
	2 9 24	御書所作文 <small>(権)</small>	夜深聞遠雁		愛親 宿禰		(江13)(句)時棟
	2 10 17	御庚申 <small>(紀)</small> <small>(権)</small>	燕雀相賀	忠輔	匡衡		(江138)
	2 12 2	敦明御読書始詩宴 <small>(紀)</small> <small>(権)</small>	御注孝經		匡衡		(江2)
	3 10 23	御庚申 <small>(権)</small>	霜樹疑春花	忠輔	道濟		(句)齊信、道濟
	3 10 23	御書所作文 <small>(権)</small>	菊殘雪花中		為政		他道長、有国
	5 5 1	道長法華三十講作文 <small>(権)</small>	雨為水上 <small>(總)</small> 絲	以言	以言	浮	(麗)伊頼、為時、 宣義
	5 5 6	内裏作文 <small>(権)</small>	初蟬繞一声		広業	心	(麗)御製
	5 5 27	道長宇治作文 <small>(権)</small>	晴後山川清	以言	公弼相		(麗)公任(句) 以言、為政、左金吾
	5 5 16	内裏 <small>(権)</small>	水積成淵 <small>七言八韻</small>			龍	
	5 7 3	省試 <small>(権)</small>	涼風撤蒸暑				
	5 7 7	御物忌内裏作文 <small>(権)</small>	織女雨羽衣 <small>(總)</small>		以言		(文)以言(麗)以言
	5 8 3	御物忌御庚申 <small>(権)</small>	秋是詩人家			情	
	5 8 16	作文 <small>(権)</small>	月是宮庭雪		弁左大	斜	
	5 9 9	重陽平座 <small>(権)</small>					
	5 11 27	道長第作文 <small>(権)</small>	勝地富風流	宣義			
	5 11 28	内裏御作文 <small>(権)</small>	寒近醉人々		宣義		(麗)以言
寛弘	1 3 3	内裏御作文 <small>(紀)</small> <small>(権)</small> <small>(関)</small> 他	花貌年々同		匡衡	春	(江108)
	1 6 2	御庚申密宴 <small>(権)</small> <small>(紀)</small>	瑤琴治世音		道濟		(麗)御製
	1 6 2	御書所同感製 <small>(紀)</small>	"				
	1 6 7	御庚申宮作文 <small>(関)</small>					
	1 7 7	内裏御作文 <small>(権)</small>	七夕秋意				
	1 9 9	重陽清涼殿作文 <small>(関)</small> <small>(権)</small>	菊為九日花	輔正	輔正	芳	

寛弘	年月日	作文の場	詩題	出題	序	韻	作品
	1 1 1	道長第作文 (関) (権)	水清似噴漢	以言	積善	秋	(麗)右府、右金吾 (句)他左金吾、有園
	1 1 1	殿上人作文 (関)					
	1 1 1	人々作文 (関)					
	1 1 1	道長第作文 (関)	四望遠情多			通	(句)音信
	1 1 1	於殿上守庚申御書所學生給 禄詩宴 (紀) (関)	再吹菊花酒				
	1 1 1	作文 (関)	風高霜葉落		為政	寒	
	1 1 1	内作文 (関)					
	1 1 1	具平親王亭作文 (権)					
	1 1 1	道長於宇治別業作文(小) (権) (関)	於宇治別業 即事		以言		(麗)左府、中行 (文)孝道、中書成王
	1 1 1	作文 (関)					
	1 1 1	宇治作文余詩和 (関)					
	1 1 1	内裏御作文 (関) (権)	秋過如流水				
	1 1 1	先日奉御作文和 (関)					
	1 1 1	省試 (権)	野无擊壤 <small>七言八韻</small>	大輔		衝	
	1 1 1	道長第作文 (関) (権)	炉邊命飲		有国		
	1 1 1	御前作文 (関)	雪是遠山花				
	2 2 3	御燈御書所作文 (紀) (関)	花貌年々同	匡衡		春	(江108)
	2 2 3	御 庚 申 (関) (小) (権)	花顔水作顔				
	2 2 3	道長弓ノ遊作文 (関) (小) (権)	花落春帰路				(麗)伊周、忠輔
	2 2 5	道長第作文 (関) (小)					
	2 2 5	道長第騎射作文 (関) (小) (権)					
	2 2 5	道長亭作文 (関)					
	2 2 5	比夕有掩韻之事 (権)					
	2 2 7	内裏七夕御作文 (関)	佳会風為使			知	(麗)御製
	2 2 7	於弓場殿試学生九人、是則 御書所衆二人有其闕仍試競 望之輩所被試也 (紀) (権)	秋叢露作珮 <small>○</small>				
	2 2 8	道長亭作文 (関)	林池秋興詩				
	2 2 9	道長直廬作文 (関) (江)	菊聚花未開				(江120)
	2 2 9	重陽平座清涼殿御作文 (関) (小) (権)	菊是花聖賢	匡衡		情	(江124) (文)匡衡
	2 2 9	道長第庚申作文 (関)	池水浮明月			澄	(江3)?
	10 6	道長第作文 (関)	雨声共葉飛				

年月日	作文の場	詩題	出題	序	韻	作品
寛弘 2 11 13	敦康親王御読書始 (紀)(小)	冬月於飛香 舍宮聽第一皇 子初読御注 孝經	弘道	以言		(麗)以言、道長 俊賢、伊周、公任 (江91)宣義 匡衡
3 3 2 20	殿上作文 (閑)		権中 納言	匡衡	(麗)匡衡(江22)、 業為時、左府、広 為義、伊周、橘 左金吾、右金 吾、源明、理、金 紀為基	
3 3 4 4	道長東三条第花宴(紀)(閑)	度水落花舞			(麗)匡衡(江22)、 業為時、左府、広 為義、伊周、橘 左金吾、右金 吾、源明、理、金 紀為基	
3 3 3 3	道長第作文 (権)(閑)	花鳥春望野			心	(江24)(麗)通直、 左金吾、右金吾
3 3 3 3	内裏御作文 (権)	春酒延齡物			時	
3 3 11 9 3 3	重陽平座 (紀)(権)				風	
3 3 11 23 9 27	道長第作文 (閑)				歌	
4 3 3 11 3 26	文章生試 (紀)(権)	芸始生				
4 3 3 11 3 26	道長上東門院曲水宴 (紀)(閑)	因流泛酒		匡衡		(江15)
4 4 3 3 20	道長第作文 (閑)(権)	林花落灑舟				(麗)道長、以言、 積善
4 4 3 3 22	内裏御作文 (閑)(権)	春色滿乾坤				
4 4 3 3 22	御庚申作文 (閑)(権)	聞酒欲醒				
4 3 29 23 22	道長馬場殿作文 (権)(閑)	新藤覆緑池				(句)以言
4 4 4 4 4	内裏密宴 (紀)(閑)	惆悵惜春歸 (殿上心)		忠輔	以言	(江60)(文)以言 (麗)以言、中書王
4 4 4 4 4	道長第作文 (閑)	流水調笙				
4 4 4 4 5 30	道長第諸道論義作文 (閑)					
4 4 4 4 5 30	左府作文 (権)					
4 4 4 4 5 30	御前作文 (閑)	清夜月光多				(麗)御製 信
4 4 7 7 15 1 30	内裏作文 (権)					
4 4 9 9 7 15 1 30	重陽宴(紀)(閑) (寛弘四年 九月九日記)	菊花映宮殿		匡衡	秋	(江125)
4 4 9 9 17	道長第作文 (閑)	秋雁教行書				(江135)(作)(談)
4 4 9 9 17	道長第作文 (閑)(権)	林亭即事				(江42)
5 4 1 23 17	道長第庚申作文 (閑)	夏夜池台即 事				(江41)(麗)伊周
5 4 11 12	道長第作文 (閑)	佳不如詩境				
6 4 11 12	御前作文 (閑)					
6 5 19 13 12	道長第作文 (権)	松風小暑寒 ?				(江8)
6 7 7	乞巧奠庚申作文於御殿 (紀)(閑)	織女理容色		為時		(江18)

		寛仁	長和	寛弘	年月日	作文の場	詩題	出題	序	韻	作品								
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第講經作文	(関)	菊残水自芳			深情	公任	
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	無樹不期春					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	左府宇治行幸	(関)	翠松無改色					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	擬文章生試	(関)	經霜知菊性					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	左府宇治作文	(関)	傍水多紅葉					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	月光隨浪動					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内裏密宴	(紀)	桃為岸上霞					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	左府宇治見紅葉	(関)	(聊句)					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長宿願作文	(関)	藤花作紫綬					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	式部省試	(小)	象載 <small>言女子篇</small> 瑜	広業			垂方	俊賢、齊信
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	御読書始	(関)	先朝第三皇	通直	為政			他実、成、公任、頼定
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長亭作文	(関)	早寒生重袞	通直				
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	左府作文	(関)	為百長兄					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	皇太后宮作文	(関)	菊殘似老人	通直				
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	遊び作文	(小)	遊び作文					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	式部省試	(紀)	拳実為秋					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第詩宴	(紀)	江山属一家					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	宇治への舟中にて	(関)	落葉泛如舟					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第庚申作文	(関)	落葉泛如舟					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	敦康親王作文	(小)	落葉泛如舟					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長作文	(関)	荷香近人衣	広業				
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	省試		徳動天道	広業				
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	山是似屏風					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内裏御作文	(関)	鶯囀唯今日					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	鶯囀唯今日					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内裏御作文	(関)	鶯囀唯今日					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	秋盡林葉老					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	道長第作文	(関)	秋盡林葉老					
3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	文殿作文	(関)	青松衣古羅					

(紀)	日本紀略
(閑)	御堂閑白記
(権)	権記
(小)	小右記
(百)	百鍊抄
(麗)	本朝麗藻
(句)	類聚句題抄
(作)	作文大体
(江)	江吏部集 (数字は作品順の番号)
(談)	江談抄
(新朗)	新撰朗詠集
(文)	本朝文粹
(扶)	扶桑集